（２）八幡山城跡

１）立地

安宅氏居館跡の北方約 300ｍの地点に位置する詰めの城（根小屋式山城）と考えられる。

写真 4-6 八幡山城跡　遠景

２）縄張りの特徴

最高所は標高約 80ｍを測り、麓からの比高は約 75ｍとなる。城域は、南北約 200ｍ、東西約 120ｍで、安宅氏城館跡では最大規模である。その土木量も群を抜いており、防御性に優れている。尾根上の先端に位置しており、急傾斜かつ深田池がある東側以外の 3 方向に横堀・堀切などの遮断施設を設け、城の内外を明確に区画する構造をとっている。特に北側と南側の堀切は、大規模なもので硬い岩盤を掘り削っている。

曲輪は大きく 3 つに分けることができる。曲輪Ⅰは、楕円形状を呈しており、周囲に高さ約 1～3ｍの土塁を巡らせている。曲輪内の中央部は、岩盤が露出していることから攪乱を受けていると考えられる。曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰの南西側に位置し、比高は約 12ｍを測る。面積は 3 か所の曲輪のなかでもっとも広く、東側の切岸を除く北・西・南側に土塁を巡らせている。曲輪Ⅲは最も南に位置し、平坦面が他の曲輪と比較して狭くなり、すり鉢状を呈している。

３）調査成果

表採資料も含めて多量の遺物が出土している。曲輪Ⅱでは集中的に遺物が出土する場所が、曲輪Ⅳ直下の切岸付近、曲輪Ⅰ直下で虎口の東側付近、同じく曲輪Ⅰ直下の南東隅付近の 3 か所である。曲輪Ⅳでは土塁上の落ち込みから集中的に出土している。遺物の内容は、ほとんどが土器類であり、鉄釘、刀装具（鯉口）、石臼、茶臼、硯、砥石、銭貨、投弾用と考えられる河原石などがある。土器類は、破片点数で 3,252 点出土している。破片は散逸している状況であり、復元できるものは少ない。また、ひとつの個体で 3～4 地区に分かれて出土しているものもあり、原位置を保っているものは少ないと考えられる。土師器（皿・土鍋・甕等）、瓦器、国産陶器では備前焼（播鉢、壺、小壺、水屋甕、甕）、常滑焼（壺・甕）、瀬戸美濃系陶器（山皿、灰釉皿、鉄釉皿・灰釉碗・天目茶碗・大鉢・壺・小壺・香炉）があり、輸入陶磁器では青磁（碗・皿・盤・壺）、白磁（皿・杯）、青花（碗・皿・瓶？）、黒釉陶器（壺）、天目茶碗がある。その他、城に関連しないものとして弥生土器（高杯）、瀬戸焼（広東碗）がある。

遺物は、15 世紀後半～16 世紀初頭に比定されるものが主となる。輸入陶磁器の中にはそれらより古い 14 世紀代のものが若干含まれているが、これらは伝世品と考えられる。曲輪Ⅱでは 2 時期の遺構面が確認されている。古い方の第一次面がどの時期まで遡るかは判然としないが、改修の時期は第二次面を造成するときの埋土に含まれる土器の特徴から 15 世紀末から 16 世紀初頭であるとみられる。火を受けて赤色化した地山面直上より 16 世紀初頭頃までの遺物が多く出土しており、そのなかには 2 次焼成を受けたものが多く見受けられる。その後、遺物等の火事場整理がなされた状況はみられないことからも、火災後は城が使われなかった可能性

もある。つまり、出土遺物からみた八幡山城跡の消長をみれば、16 世紀初頭頃に改修され、時をおかず 16 世紀前半には火災に遭って使用されなくなったとみられ、現状で残る遺構は 16 世紀初頭のものといえる。

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 15 年 (2003)	日置川町 教育委員会 (安宅荘中世城郭 発掘調査委員会)	発掘調査	・ 土塁部分で、古い時期（第一次面）の遺構を利用して、新しい時期（第二次面）に改修していることを確認。 ・ 第一次面で、虎口、土塁石垣・階段、スロープ状の上り口の検出。 ・ 第二次面で、虎口、土塁の石垣・階段、礎石を検出。 ・ 第二次面で全体的に火を受けていることを確認。

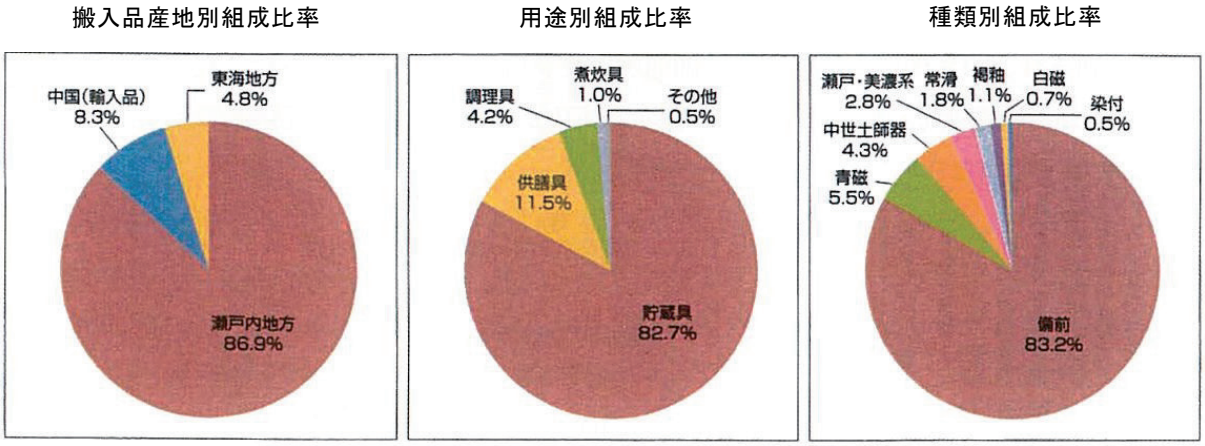

図 4-7 八幡山城跡出土の中世遺物組成比率グラフ（北野 2017 より抜粋）

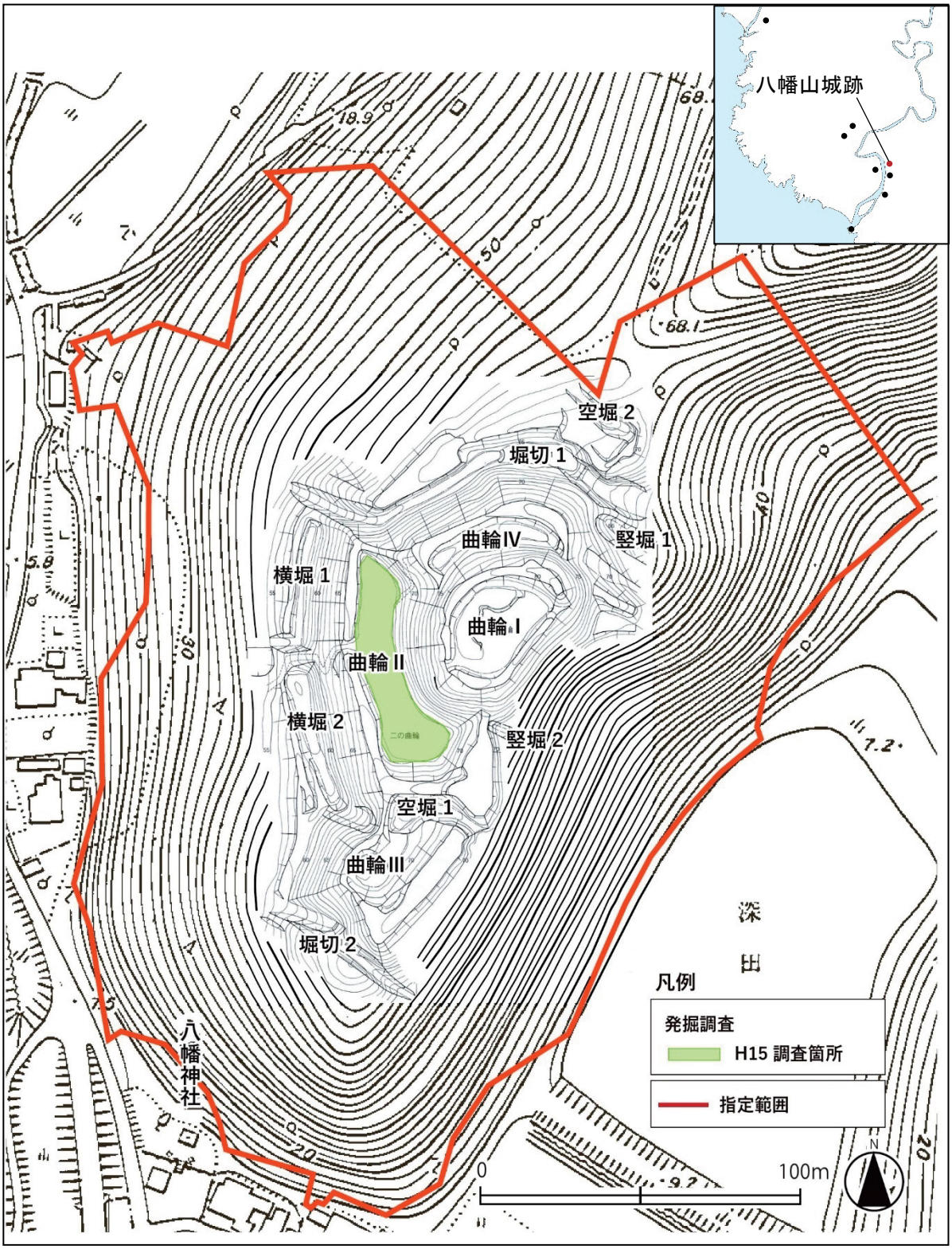

図 4-8 八幡山城跡　指定範囲と測量図

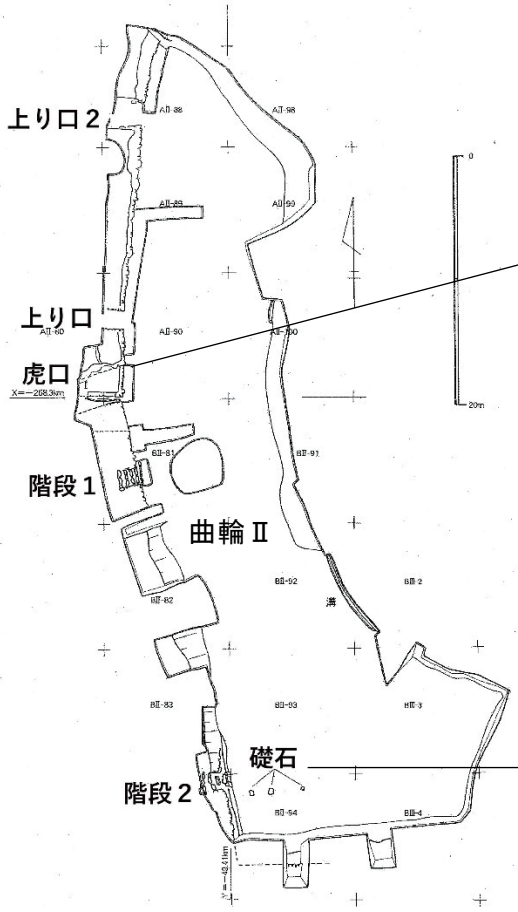

図 4-9 曲輪Ⅱ　発掘調査平面図

写真 4-7 曲輪Ⅱ　虎口

写真 4-8 曲輪Ⅱ　階段２

写真 4-9 八幡山城跡　発掘調査出土遺物

（３）中山城跡

１）立地

土井城跡の南西約 300m、田野井平野のほぼ中央にある独立丘陵上に位置する。この丘陵は、日置川の蛇行とその後の流路の変化が生み出した環流丘陵である。

写真 4-10 中山城跡　遠景

２）縄張りの特徴

城の規模は南北約 100m、東西約 60mで、大小 2 つの方形の曲輪からなり、東側を除く 3 方向に土塁と横堀・堀切を設けている。曲輪Ⅱの土塁の内側と天端部には石積みが巡る。

３）調査成果

発掘調査では、染付、青磁、白磁、瀬戸美濃系陶器、備前焼、土師器、鉄釘、土錘、投弾用石等が出土している。ほとんどが中世期のものであるが、江戸時代初頭の肥前陶磁器が混じる。調査面積と比較して出土量は大変少なく、コンテナ（25ℓ）3 箱分となっている。

備前焼の口縁部片は玉縁状となっており、同じ安宅荘域の長寿寺から出土した暦応 5 年(1342)の紀年銘をもつ備前焼大甕とほぼ同時期に比定される資料である。高台内に「富貴佳器」という吉祥句が崩れたかたちで描かれている青花皿の底部片は、見込部分に蚊竜文が描かれている。また見込部分に獅子文が描かれている青花底部片が出土している。これらの青花は、根来寺焼亡の直前の時期に比定される資料となっている。

中世期の遺物としては、14 世紀代の備前焼口縁部片から、16 世紀後半の青花、17 世紀前半の肥前陶磁器まで出土している。紀中・紀南における山城跡の発掘調査では、15 世紀後半から 16 世紀前半代に比定されるものが遺物組成の中心となっており、伝世品と思われる 14 世紀代の遺物が出土することはあっても、16 世紀後半～17 世紀前半代の遺物はほとんど知られていない。中山城跡の出土遺物の様相は、安宅氏居館跡の様相に近いと評価できるが、出土量の僅少さから断定は難しい。

調査年度	調査主体	調査方法	調査成果の概要
平成 17 年（2005）	日置川町教育委員会（滋賀県立大学考古学研究室）	測量調査	・ 丘陵の2つのピークのうち北側のピークにおいて土塁や堀切などが良好に遺存していたため、丘陵部北側から行う。
平成 18 年（2006）			・ 丘陵南側ピークと前年度測量地区との接合部を主に行い、春日神社まで測量対象地を広げる。
平成 24 年（2012）	白浜町教育委員会	試掘確認調査	・ 土塁の石積みの確認。 ・ 曲輪Ⅰと曲輪Ⅱ間のスロープ（石積み）の確認。

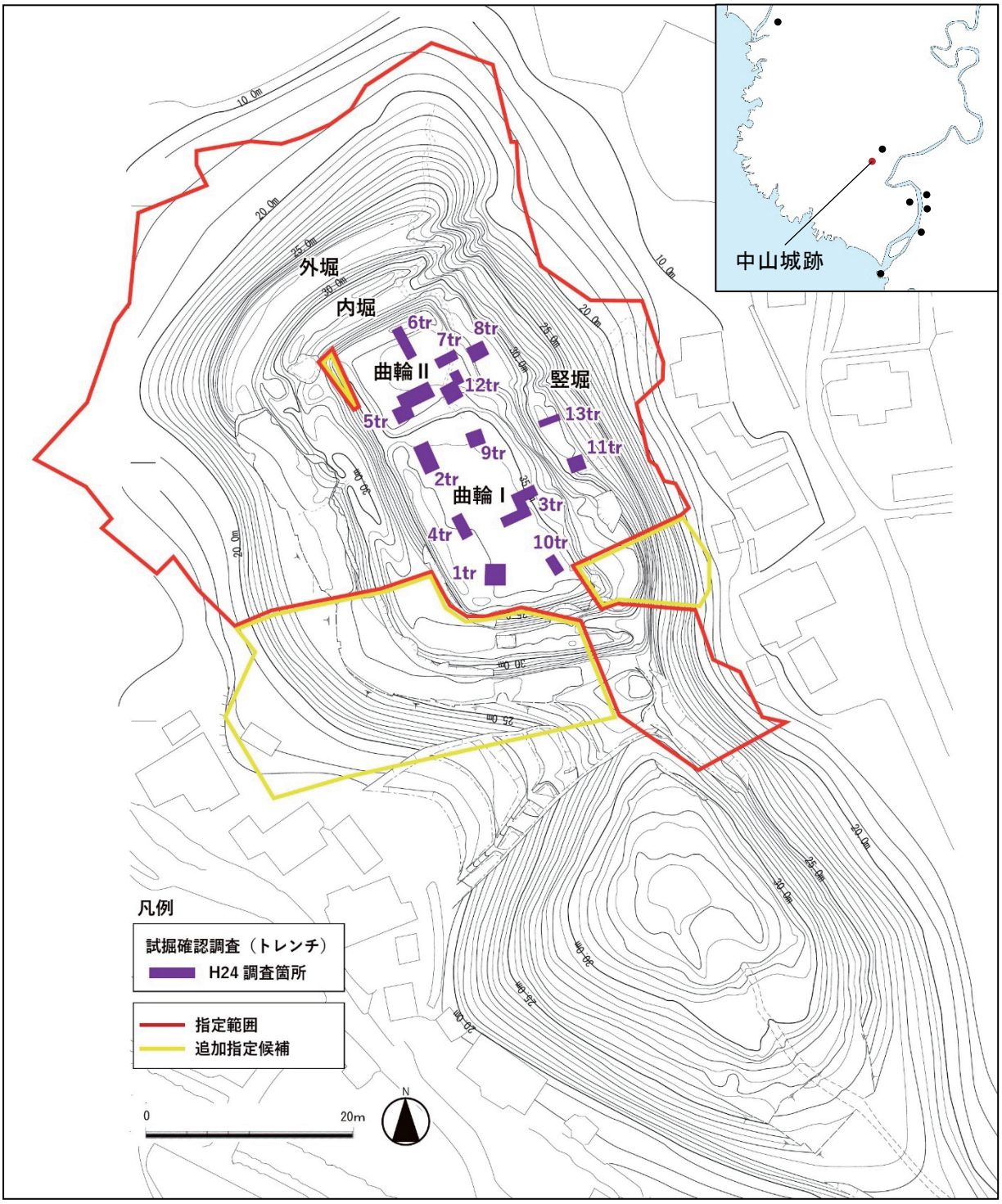

図 4-10 中山城跡　指定範囲と測量図